

## 博士論文の要約

氏 名 高 燕文

論文題目 「満蒙開拓」をめぐる言説空間——大陸開拓文学を中心に——

本論文は戦時下、「満洲農業移民」をめぐる大陸開拓文学の中に構築された「満蒙開拓」の諸相を検討するものである。先行研究に基づいて、当分野における従来の研究の枠組を突破し、これまでの未発見の文献を含め、国内外に散在する大陸開拓文学の作品をできる限り発掘・整理した上、日本内地から一時的に「来満」した作家だけではなく、「満洲」在住の日本人作家及び開拓民自身が書いた作品にも注目し、大陸開拓文学を一つの「自己完結」したテーマとして、その関連する作家や作品を総体的に整理、分析した。

第一部（第1章）では、まず「満洲農業移民」をめぐる懐疑・宣伝・動員・誘致などの諸言説が交錯する言語空間を取り上げ、その生成から拡大までのプロセスを辿った。具体的には、主に日本人農業移民送出の時間軸に沿って、四つの時期に分け、大量移民期（1936～1941年）を中心に、各時期の状況に応じて、著書、雑誌、パンフレット、絵葉書、展覧会、映画などの表象メディアを整理・分析し、それらがいかに下地となって大陸開拓文学を醸成したかを提示した。さらに、各地に散在する資料を発掘し、その中に登場する大陸開拓文学の概況——概念定義・その生成機運に関与した各文芸団体の成立・「日満」双方の関連事業活動——を詳しく説明した。

第二部（第2章、第3章、第4章、第5章）では、まず一時的に「来満」した作家とその作品について、作者それぞれの立場・視察体験、作品の内容・文学性・影響力などにより、主に和田傳、島木健作、福田清人の3人の作家と作品を選出し、また、「満洲」への旅行の際、開拓地を訪問した石橋湛山、石山賢吉、小林秀雄とその作品を補助的なテキストとして整理、分析した。

第2章では、和田傳の『大日向村』、『殉難』を代表とする作品群を取り上げた。まず、作者の恐慌下の農村への関心、朝日新聞社の友人からの要請、農相・有馬頼寧との接近、農民文学懇話会・大陸開拓文芸懇話会への参加、日本内地農村と「満洲」への視察などの事象を詳しく考察し、その文脈の中で、農民文学懇話会によって「満洲」に派遣された作家の筆頭としての和田傳がどのように『大日向村』などの作品を創作したか、その経緯を追跡した。次に、その具体的な作品分析において、日本内地の視点から分村移民のモデルを描く『大日向村』と、「満洲」現地を舞台とする小説『殉難』・その他の視察記という二つの部分に分けて検討を展開した。和田は『大日向村』の中で、移民計画の立案・実施過程に焦点を当て、大日向村の「分村神話」を讃えながら、分村移民の真実な一面も描いた。また、『殉難』・その他の視察記の中で、彼は、「満洲」の開拓地に存在する既耕地の占用、「満人」・朝鮮人の労力の雇用、営農形態の矛盾などの問題に触れる一方、この「新天地」をめぐる希望についても熱く語った。これらの作品に対するテキスト分析を通して、移民

政策実施と対外宣伝との落差・ズレを抽出した上、その文学表現上の限界を指摘し、作者の複雑な心像風景を提示した。

第3章では、島木健作の『満洲紀行』及び『或る作家の手記』を考察の対象とした。当時農民文学懇話会の二番手の派遣作家として「満洲」に渡った島木は、旺盛な興味と新鮮な感受性を持って、開拓地を隅々まで真剣に観察し、『満洲紀行』の中で、「満蒙開拓」という「大きな理想」への共感を表したと同時に、開拓地という実在の生活空間から浮かび上がってくる様々な問題を鋭く批判し、またその解決法を熱心に建言した。一方、「来満」前の随筆と『或る作家の手記』の中では、自らの作家として理解されない苦痛や政治と文学に関する矛盾した思考も詳しく記述した。これらの作品に関する分析を通して、開拓を題材とする際の国策に組み入れられる宿命を是認する上で、国策の具体的な実施形態の中に内包される不条理や欺瞞を暴き出し、それへの順応と抵抗の間に揺れ続ける作者の姿を浮き彫りにした。

第4章では、福田清人の『日輪兵舎』、『大陸開拓』、『大陸開拓と文学』などの作品を取り扱った。福田清人は大陸開拓文芸懇話会の主幹で、大陸開拓文学の熱心な提唱者である。また彼は「満蒙開拓青少年義勇軍」に対してきわめて強烈的な執着と興味を持っていた。「満洲農業移民」を日本人の真の「大陸発見」者だと主張した福田はその一連の作品において、日本記紀文学から発掘した「創造・開拓精神」を移民事業に応用し、日本人の「満蒙開拓」を理念的に正当化・合理化させた。その文学作品群に関する分析を通して、日本人の「大陸進出」を日本文学上の変革機運として捉え、「新たな文学の開拓」を唱える福田が自作中で夢見た「大きなロマン」を解析した。

第5章は、上記作家・作品の補論として、開拓地が観光化された時期に現地を訪れた石橋湛山、石山賢吉、小林秀雄の作品について考察した。「満洲」の産業視察を目的とする石橋の『満鮮産業の印象』、石山の『紀行 満洲・台湾・海南島』と「満蒙開拓青少年義勇軍」孫呉訓練所を実見した小林の「満洲の印象」を取り上げ、それぞれの作中に描かれた一般開拓民と義勇軍の生活に潜んでいる問題や彼らの目に映った開拓地の風景を確認し、内地知識人の「満蒙開拓」に関するイメージの一側面を整理、分析した。

第三部（第6章、第7章、第8章）では、上記の一時的な「来満」作家と立場の異なる「満洲」現地在住の日本人作家とその作品について考察した。その際、第二部と同様、作者それぞれの立場・滞在体験、作品の内容・文学性・影響力などにより、具体的に山田清三郎、望月百合子、菅野正男の3人を選出し、その文学的営為を整理、分析した。

第6章では、主に山田清三郎の『私の開拓地手記』をめぐってテキスト分析を展開した。転向後の山田清三郎は開拓地視察の目的で「渡満」し、一「満洲」在住者として、後に「満洲」文壇の中心的な存在となった人物である。開拓民と共に生活を送る間の見聞・体験を記したその『私の開拓地手記』に焦点を当て、そこに描かれた開拓地風景、開拓民たちの姿及びモチーフとしての「民族協和」などを確認し、作者が「満洲」という「複合民族の生活空間」に賭けた「夢」を析出した。

第7章では、望月百合子の『大陸に生きる』という随筆集の内容を分析した。望月百合

子は一時療養のために「渡満」し、その後、当初の予定を変えて「満洲」に定住した。彼女は「満洲新聞社」に勤めたが、都市と農村が互いに無関心である現況を痛感し、仕事の傍ら、「北満」・「東満」の開拓地、殊に極僻地のいくつかの開拓地を何度も訪れていた。この作品集に収録したのは本人の開拓地を視察した記録、内地に向けた大陸花嫁の宣伝、また「満洲」婦人文化の創生をめぐる様々な実験である。ここからは、一女流作家の開拓地に関する見聞・感想が読み取れるのみならず、「文化的上の処女地」とされた「満洲」で日本人女性教育に投身する作者自らの「開拓」情熱もはっきりと確認することができた。

第8章では、菅野正男の『土と戦ふ』と『開拓地の春』の両作品について考察を加えた。視察者・傍観者ではなく、菅野正男は義勇軍の一員として、「満蒙開拓」実践が彼の生活そのものである。一時、論者たちに激賛され、大々的に宣伝された小説『土と戦ふ』も『開拓地の春』という雑録集も、作者の生々しい体験記として、他の作家にない新鮮感と抒情性が漂っている。その具体的な内容に関する考察を通して、厳しさと美しさを兼ねる「北満」の自然の中で、粗悪な居住・飲食、過重な労働、寂しさと虚しさに耐え、屯墾病などの風土病と闘いながら生活する一方、一時的に「試練」に打ち勝つ喜びを味わい、未来への「壮大な夢」を信じて奮闘しつつも、途中で挫折し、ついに帰らぬ人となってしまった一開拓青年の哀れな姿を浮き彫りにし、現地作家の典型的な実例を提示した。

以上のように、本論文は膨大な作品群から9人の作家の作品を取り上げ、大陸開拓文学を総合的に検証した。一連の具体的な作品の分析により、本論文において解明されたことを以下のようにまとめる。

「満洲農業移民」が大々的に宣伝される時代を生きていた作家たちが、その作品の中に提示した「満蒙開拓」に関する描写及びその背後に潜んでいる認識には多くの共通点が存在しているのが想像できるだろう。このことは、彼らの創作が広義的に見て、いわゆる「満洲」・「満蒙開拓」をめぐる共通した言説的枠組を超えていなかったことを意味する。一方、「満蒙開拓」という大きなテーマの下で統一されながらも、作家たち各自の立場、人生体験、関心の焦点、開拓地の視察体験、「満洲農業移民」という国策への理解の度合いなど様々な異なる要素が複雑に絡み合ったことで、それぞれの作品の内容上の独自性と多彩性を生み出してもいる。そして、このような多彩な文学表象の介入により、すでに大陸開拓文学誕生の背景として存在し、公私様々な記述が織り込まれた「満蒙開拓」の言説空間が一層拡大され、充実されるものとなった。

それと同時に、これらの文学表象の中には、先行したメディアで作上げられた既存の言説と合致するものもあれば、在来の言説を打破し、公式資料などでは読み取れない彼ら独自のものもあり、「満蒙表象」はけっして一様ではなく、きわめて重層的であった。言い換えれば、この多彩性がある文学表象の中に、国策に順応する一面があると同時に、「満蒙開拓」の公的な言説の亀裂と矛盾を逆証する側面が内包されている。「満蒙開拓」の記録・表象空間の生成・拡大、日本文学における「満洲イメージ」の形成、東アジアにおける人的移動に伴う文学上のリアクションという三つの文脈において言えば、膨大な作品量を持っている大陸開拓文学の登場が看過できない大した存在として、読み直す必要性和重

要性がある。

その意味で、本論文は、単に一作家、一作品を農民文学、植民地文学、「転向文学」、「国策文学」などの枠組で単独に考察するのではなく、その背景としての大きな言説空間から切り込んで、一連の作品を大陸開拓文学という全体的概念で総括した上で、代表的な作品の分析を通して、この作品群がもたらす「満蒙開拓」をめぐる言説空間の拡大・変容を解明し、大陸開拓文学、さらには「満蒙表象」を読み直す可能性と方向性を提示し、大陸開拓文学の新たな位置付けを試みようとしたものと結論することができる。